

令和3年度

戸田市教育研究集録

戸田市教育フェスティバル開催

オンライン研修

令和4年1月11日(火)、戸田市立教育センターにて「戸田市教育フェスティバル」を開催し、学校の教職員がWEB会議システムによるリアルタイム配信を視聴するという形式で研修を行いました。

今年度は、「こどもを主語にする学校をつくるために」をテーマに、独立行政法人 教職員支援機構 理事長 荒瀬 克己 様をお招きし、第一線で御活躍をされている立場から御講演いただきました。

講演
テーマ

こどもを主語にする学校をつくるために

独立行政法人教職員支援機構
理事長 荒瀬 克己 氏



*はじめに

こどもを主語にする学校をつくるためには、まず、教職員を主語にすることが重要である。そのためには、学校づくりをしていく教職員、その中心となる校長、学校づくりを支える教育委員会、この三者が共に学び合う関係であることが必要である。その関係を確立するには、学習指導要領や令和3年1月26日の中教審で取りまとめられた『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』等を手掛かりとしていただきたい。

こどもたち一人一人の実態、集団となった時の実態、教職員の状況や保護者との関係、地域との関連など学校の実態などをしっかりと把握し、先生方が「どんな学校にしたいか」を明確にしていくことが重要である。

◆「令和の日本型学校教育」の実現に向けて

新学習指導要領はまず児童生徒に着目することを意識して書かれている。新学習指導要領の重要な点として「主体的・対話的で深い学び」が挙げられるが、その着実な実施のためには、学習指導要領に示された言葉一つ一つを丁寧に考えていくことが重要である。それがこどもを主語にすることにもつながるのである。

答申の「はじめに」には、ICTの活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備により、「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた「協働的な学び」とを一体的に充実させることを目指すことが示されている。さらに、これを踏まえ、各学校段階におけるこどもの学びの姿や教職員の姿、それを支える環境について、「こうあってほしい」という願いを込め、新学習指導要領に基づいて、一人一人のこどもを主語にする学校教育の目指すべき姿を具体的に描いている。

その実現には、「探究」が有効である。自分がやることにどんな意味があるのか、その意義は何かを自分自身で気付けるようにしていく。その仕掛けをつくっていく。そして、身に付けた資質・能力を活用して探究の過程全体を自ら遂行し、結果を取りまとめ、発表する。

指導にあたっては、児童生徒自身が気付きから疑問を形成するように促すことが求められる。

評価にあたっては、成果や新たな知見の有無またはその価値よりも、探究の過程において資質・能力をどの程度身に付けることができたかや、探究の過程全体を俯瞰的に捉え、自らがどの位置にいるか、どこで間違ったのかなどが説明できるようになっているかという点を重視すべきである。

「こどもを主語にする」学校づくりのためには、まず児童生徒の現状、学校の現状を組織としてのメタ認知をしていく。そして、言葉の定義を共有し、互いに話せる場をつくり、コミュニケーションを図っていく。その中でこどもを主語としながらRPDCAサイクルを行っていくことが重要である。

まずは、教師自身が探究し、ワクワクしながら取り組んでいただきたい。

